



「殿の招きの花見酒」

名譽院長 西田 敬

愚痴じゃなければ世が世であれば、殿の招きの月見酒と続けば、御存知、酔払い親父の十八番、お大利根月夜♪ 然し、招き主が総理大臣で、而も場所が御苑とくれば、朝から振舞酒で酔っぱらう訳には参るまい、罰が当たる。茲は先ず御茶でも一服で、文字通り御茶を濁しておく方が無難。

森鷗外の著書、キタセクスアリスに戸惑いを覚えぬ読書人は居るまい。之が欧文の儘のVita sexualisなら和訳の仕様も有るだろうが、他の作品群と比較して矢張り、異彩を放っている。誰しも、中学から高校の6年間は英語教育を受けた筈。夫にも拘わらず、通常は読めない、書けない、喋れない。口説けないし、恋文(love letter)すら覚束ない。文科省の関係者辺から、この季節に為れば、年中行事の如く出される意見が、「日本人の英語力を、何とかせにやいかん!もっと若年時から始めたら如何だ。

いっそ、学童期から始める乎?と云わん許。季節性から、恰も御役人の流行病か発情期。確かに日本語も学校での教育は学童期から中学卒業までの9年間は費やして居る。その甲斐あって卒業までには口論、口説きは疎か、老成た餓鬼なら恋文ぐらいは平気で捻り出す。

茲で山並陸一先生*に御教を請うのが筋。英語を始め、大概のヨーロッパ語は語源、或は祖語を印欧語(Indo-European Language)に求め得る。例外は世界一難解な言語と云われるeuskara(バスク語)、同様に日本語の祖語は大和言葉、西欧語とは縁も所縁もない。抑々、言語体系が全く異なる。習い憶えるには難がある。然れば、命懸けで種子島に渡来した宣教師Francisco de XavierもBasque:バスク人だったが、伝導の熱意か神の御力か、ザビエルのバスク言葉と島民の鹿兒島弁とで、意志の疎通性に、殊更なる難儀や齟齬は生じなかつたし、物議も醸さなかつた。

ところで、Proto Indo-European Language(印欧祖語)はヨーロッパからインド北西部に広がる言語に共通する祖語である。その祖語で云う、gna(生む)はpregnant(生む前の、即ち、妊娠)として生き残り、更に形を変えてgen(種)からgene(遺伝子)へと発展した。婦人科学(gynecology)にも祖語がありそう。ギリシャ語のgyne(ギネ)は妻の意味、そうだったの禾!畏まって婦人科学(gynecology)と文反り返っても、所詮、女性のある可き姿、有り様を学ぶ学問、貝原益軒の女大学に同じであった乎!

*山並陸一:「語源でわかつた!英単語記憶術」文春新書

